



鏡の中の女たち 富田常雄



© 1968

TSUNOEO TOMITA

第1刷 昭和43年6月4日

定価430円



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

鏡の中の女たち

著者 富田常雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

振替東京3930

電話東京(942)1111(大代表)

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

目次

鏡の中の女たち

五

七番日記

一七

風紋

二八

老ゆらくの骨

二五

鶯

三三

装丁 山藤章二

鏡の中の女たち

さんた・まりあ

一

街は暮れかけて、食料品を売る小さい商店の多い、この狭い通りは賑やかさと騒音がひときわ増し、小型でも躲^かわすのに骨の折れる道を後から後から自動車が行き交っていた。

角が煮豆屋と蒲団屋で、隣りは餃子屋^{ぎょうざ}一つを挟^すんで鮎屋^{すし}で、左隣りは旅館、前は牛肉屋と八百屋が並んでいた。従って、夕方の騒音は是非もなかったが、その間をリヤカーの豆腐屋が高とラッパを吹いて呼び売りしているのだけが周囲の空気に抵抗しているようで可笑^{おかし}しかった。

鏡の中の女たち

美容室ローズは四谷のそういう街にあった。

客のシェルカール型の髪に仕上げの毛ピンを使っていた子^こは豆腐屋のラッパが必要以上に大きく、それが、自棄^{やけ}のように思え、仕事をしながらも微笑がわいた。

常連の客の滝井仙子が鏡の中でそれを見つけたらしく

「ちょっと、豆腐屋のラッパって、もう時代おくれで変ね」

と、言って笑った。

「そうですわね」

「でも、あたしにはなつかしいのよ。子供の時分に、前は天びん棒で桶を担いでね、ゆっくりラッパを吹くのよ。聞いてると妙に悲しかったのを覚えているわ。夕方がさびしかったのね、こんな事をいうと年が判っちゃうけど」

仙子は鏡に向かって言った。

「奥さんはずっとお若い感じですよ」

職業がそう言わせた。

「ふん、今更。女はね、四十の声をきくと、とてもあせるものなのね、なんとか若さをお引き留めしておこうと思って」

「いいえ、ほんとに奥さんはお若いわ」

「お世辞言いっこなし」

笑いながら、仙子はきめつけるように言った。彼女がアパートに住む戦争未亡人であり、現在では会社の重役に囲われていることは周知の事実で、また、自分でも大して隠そうとはしていなかった。和服姿の似合う女だった。

時間のせいかな、珍しくほかに客はなく、二人の美容師はドライヤーのむこうにある客用の椅子にかけて週刊誌を読み、インターンの艶子はシャンプー台の掃除をしていた。右隅のラジオが小さくドラマらしいものを流していたが、外の雑音に消されて、ぶつぶつ小言を言っているようにしか感じられなかった。

「時子山さんとこやま」

と、仙子はてい子の姓を口にして

「始めね、あたし、時子山って聞いた時、あんたは床山の娘さんかと思ったのよ。ほら、役者のかつらね、あれを扱うのを床山って言うし、あんたが時子山なんで、ふっと錯覚をおこしちゃってね、ほゝほゝ、ご免なさい」

「ほんとに時子山てい子なんて、いやな名ですわ」

「珍しいほうね。床山で考えたんだけど、あんたたち、美容師は昔でいえば髪結いさんというところね」

「そうでしょかしら」

「まあ、そうよ。だけど、年が違うな。あんたくらいの若さじゃ梳手すきてというところね。まあ、一人前の髪結いさんは三十は過ぎてたと思うわ。年季がはいってないと一人前にはなれないしね」

「美容だって同じですわ」

「美容学校があるじゃないの。あれ、一年でしょう。手っとり早いじゃないの。ちよいと、煙草のまして」

仙子が鏡の前に置いたケースから煙草を抜いたので、てい子は店のマッチをすって火をつけてやった。仙子は仕上げのほぼすんだ自分の髪かたちを鏡の中でためつ、すがめつ眺めた。

「でもね、奥さん、昼間は一年、夜間は一年半ですけれど、インターンを一年、それから、学科と実地の国家試験を受けて免許証はおきるんですけれど、お客さんの頭をいじるまでにはなかなか成れないんですよ。まあ、五年かしら、始めから勘定したら」

「この右の毛、もう少し上にあげてよ」

「はい」

仙子はうわの空で聞いているらしく、てい子が額の毛を直すのを真剣な表情でみつめていた。

「それでいいわ」

直されたのを改めるように見てから

「今の髪結いさんの話ね、なんしろ、女手一つで収入が^{みどり}いいから、その亭主というのは大抵は怠け者と相場がきまつていてね、昔から髪結いの亭主のことを怠け者の代名詞にしていたのね。毎日、ごろごろ遊んで居て、女に稼がせるんだから、いい株じゃないの。亭主の方はその代わりに夜は大サービスをするってわけね。まむしを飲んだり、朝鮮人参を食べたり、あれ、飲むのかしら。よく知らないけれど、むやみに精力をつけて、丁寧に夜通しサービスする任務があるらしいわ。あんたたちはどうなの」

客の居ない事が滝井仙子を饒舌^{じょうまつ}にした。てい子は別に赤面もしなかったが、シャンブー台の艶子は赤くなった。

「結婚したことありませんもの。それに、第一、わたしたちの給料じゃ、とても」

「だって、恋人ぐらいはあるでしょう」

「さあ、どうですか」

「髪結いの話じゃないけれど、女っていいらしいものよ。そうやって骨も肉もがたくたになるまで相勤められると男が可愛いのね。自分は懸命になって働いては貢^{みつ}ぐんだから」

「いじらしいかも知れませんが、そんな男って嫌いですわ」

「それじゃ、時子山さんの恋人はサービスわるいのね」

「いやですわ、あたし、髪結いさんとは違いますもの」

「ほゝほゝ、ずっと若いわね」

「若くはありませんけれど。お待ちせしました。どうぞ」

そう言い、手鏡を取って渡し、客が合わせ鏡をして出来上りを眺めおわるのを待ち、てい子は客の肩のタオルをとって軽く頭を下げた。

「ありがとう。よく出来たわ」

と、仙子は世辞のように言い、鏡の前の煙草のケースを取ってセット椅子から降りた。

ブルーの壁にかかっている、古くなった聖母マリアの額がこの店には客種から見ても、どこか不似合だった。が、女経営者は代えようとしなかった。

「床の中で暴れるわけじゃないんだけど、あたしは直ぐ崩れちゃうの。いっそ、かつらということにしようかしら」

石油ストーヴのそばで煙草をつけ、ハンドバッグの口金はずしながら、仙子は独りごとのように言った。

「勿体ないと思えますわ、奥さん」

てい子は世辞のように

「そんないい毛をしていらっしゃるのに」

「そうね、主人が若い時分、熱海の旅館で年増芸者をよんだ事があるんですって。ところが、いざ寝る段になったら帳場から茶筒を借りて来て、自分の島田のかつらをすっぱり脱いで茶筒に載せて枕元に置いたんですって。羽二重^{はふたえ}をしていたか、どうかは聞かなかったけれど、主人に言わせると、まるで顔が違ってしまったって、枕元のかつらがグロテスクで、どうにも気が起こらないで大きくならないじまい。ついに用いなかったと言うのよ。この話は話としちゃわかるけど、男は寝れば、まあ、頭の方は気にならないで、もっぱら性帯をまさぐって興奮して来るものだもの。まあ、用いないなんて嘘^{うそ}っぱちね」

「いじめて上げればいいのに」

色白のてい子は首をすくめ、擲^や擲^ゆするような茶目な素振りをした。

「今さら泥を吐かしたって仕方がないもの」

「でも、奥さん、そういうお取り調べをして旦那さまをいじめるのも、お二人の楽しみの一つになりませんの」

「あんた、相当ね。経験者は語るところね。恐れ入ったわ、お勘定して」

仙子はハンドバッグから赤革の銀貨入れを出してレジスターの前に立った。

外はいつか暮れ切って、客が帰ったあと、今まで食事後、二階で楽をしていたらしい主任の

宝生玉代ほうしゅうが白衣姿で降りて来た。二十八歳になり、てい子よりも四つ上だった。

「どういう事なの、これは。まるっきり暇ね」

そう言い、玉代は店の中を見廻して

「楽でいいけど、お給料もらうのに気がひけるわ」

「構わないわ、こういう日もなくちゃ。あたし、平気」

と、てい子は反撥するように

「一日に十五人もやらされることあるんだから」

「大晦日みそかぐらいですよ。そんな事」

「でもないわ。第一、十人以上やることは無理なのに、この店じゃ、たびたびよ」

「お名ざしのお客が多くて、てい子さんは人気があるんだから、女職人として、以て瞑すべしよ」

「職人なんて言ってもらいたくないな。美容師って名称があるんだから。お互いに」

「いいじゃあない。女職人だって。誇り高き職人気質かたぎというのが昔からあるんだから」

面長な玉代は真っ向からてい子に挑みかかっていた。

「あたし、この頃、腕と人気ということを考えてるわ。人気に頼って腕の方はお留守になってさ。いい加減なごまかしでお客に取り入ってるような美容師は下の下だと思うようになったの

よ」

「そう、宝生さんはそう言いたいのか」

てい子は唇に怒りの力をこめた。

「でもね、バーのホステスや、芸者なんかなら、それも言えるかも知れないけれど、美容師は腕ですからね。髪の上上げはごまかせないのよ。お客さんの顔や姿に合った髪を仕上げて喜んでもらう、それが美容師の生きがいじゃないの。だから、毛ピン一つの使い方にだって気を配っておろそかにしないことね」

「おや、あんた、お説教しようというの。笑わせないでよ」

玉代にはこの店の主任だという誇りがあった。

「美容師の人気はそういうところにあるんで、お客の気に入るように仕上げるか、仕上げないかだけよ」

「釈迦しゃかに説法よ」

「あら、宝生玉代さんはいつお釈迦様になったの」

てい子は負けていなかった。

表の硝子ガラスに客の影が写った。

「宝生さんも、てい子さんもよして、お客さまよ」

ドライヤーのそばの椅子にかけていた英子が二人に注意して起ち上がった。前後して二人入って来たが、きょうは遅出らしい常連のホステスだった。続いて、大通りの向う側にある薬局の娘が入って来た。

美容室ローズはすぐ手一ぱいの忙しさに戻った。

二

八時を廻ってから終業のカーテンをおろし、掃除をすませた頃には宝生玉代の姿はなく、いち早く何処かへ出て行っただけだった。

インターンの艶子と、英子、瞳の三人は主任の玉代と共に住込みだったが、てい子だけは通いだった。訊かれると、てい子は顔をしかめるようにして、自由だし、勝手だからと答える。男と同棲しているわけでもないのに、誰しもが住込みの方が楽だし、経済的だろうと言ってくれたが、てい子はただ笑っているだけであつた。どちらかと言えば明るく朗らかな性格で、主任の玉代とはしばしば張り合つて衝突はするものの、英子も瞳もわずかずではあつたが店へあとから入っていたので、てい子を先輩として扱っていたし、腕の点でも一目置いていた。

待つて居た大学生の西尾時夫から電話が掛かつて来たのは夜食をすませ、三人が二階へ上がつて居たので、てい子は階下に居て、直接その電話に出た。